オンライン例会（横浜・川崎支部）　　2021.4.17

“戦争の記憶”を次世代へつなぐ　～現代の「若者」から、戦争の時代を生きた「若者」への手紙～

北川直実(編集者)

参加者:25 名

報告

航空会社の機内誌編集部を経てフリーに。戦争体験の継承が問題になる背景として 2019 年の人口統計によると、75 歳以下の戦後生まれが人口の 85%。吉田裕さんは国民学校入学前の世代を省くと、人口の 1 割を切っている。15 人の証言者の一人 3 月 28 日に李鶴来さんも亡くなった。いよいよ語り部がいなくなる時代になったと思っている。地方の小さな博物館が閉鎖されている。収蔵能力にも限界がある。戦争を伝える貴重な資料を廃棄せざるを得ない状況になっている。戦友会が解散して慰霊碑も管理者がいなくなる。吉田さんによれば戦争の賛美も重要な記憶だが、朽ちていこうとしている。

平和博物館では、非体験者の取り組みが始まっている。ひめゆりが早く 2003 年。広島では体験者とともに活動し継承者として育成。長崎では広く交流証言人を募っている。NHK の戦争証言アーカイブ。戦争体験放映保存の会の全国キャラバンや、ブリッジフォーピースでは 15 分のビデオを流した後、参加者で対話する取り組みを続けている。様々な継承への模索が始まっているがその一つとして、私たちの手紙プロジェクトがある。

1960 年生まれで、父母は戦争体験を持っている。子どものころ傷痍軍人を街で見かけた。2001 年に桶川の小学校の先生に誘われてカンボジアに行った。その時に義足の少年と出会い、21 世紀になって戦争の世紀が始まったという印象を持った。そのころから戦争の問題を編集で取り上げるようになった。

2005 年に毒ガスの被害者を追って中国東北部にいった。撫順戦犯管理所に向かうバスの中で元戦犯の日本人から自分は中国の農民を殺したという話を初めて聞いた。そこから、もっと戦争体験者から話を聞きたいと思った。そのころ同世代の 3 人が集まって、最後のチャンスだから証言を聞き、写真を撮ろうと考え 10 年かけて活動して本にまとめた。仕事以外の持ち出しとしてやってきたので、うまくいかなかったこともあった。

篠塚良雄さんが亡くなった時に次の世代に伝えなければと強く思った。2001 年生まれの杉村元くんがいっているが、戦争はゲームの世界のこと。どうしたら若者達に自分事として受け止めてもらえるか。目の前の証言者は 80 代だったが、戦争体験した時は 10～20 代の若者だったということに気づいた。今の若者と同世代なのだから、同世代だった戦争体験者へ手紙を書いてもらおうと思った。

証言者は 1945 年 8 月 15 日には平均して 18.5 歳、手紙を書いた現代の若者は 22.4 歳、翻訳した若者は 23.7 歳。すべて同世代であることにこだわった。証言は一人称でまとめるという形にした。

出版したら反響が大きくあった。広がりの一つとして、演劇で証言を俳優さんが朗読会もしてくれた。自分の身体を通して証言を伝えるというのは、一つの可能性があると思う。ほかの出版後の広がりとして、海外に紹介したい日本の本として 2017 年に選書してくれた（Japanese Children’s Books）。原爆以外には一般の市民の戦争体験を伝えるものや市民が振り返り今あの戦争をどう思っているかをまとめた本は海外にはほとんどないということだった。

本に関する考え方に影響を受けたものとして、山本唯人さんの書評があり、リアルな学びの空間とリンクさせ、様々な国籍や背景を持つ人たちと読みあう体験をしたらよいのではといってくれた。本を作っ

て編集者の仕事は終わりと思っていたが、活用してもらう、活かしてもらうという本もあると考えた。

2017 年から翻訳をしようということなった。加害国と被害国の若者たちがこのプロジェクトに参加し一冊の本を一緒につくることは、世界へ発信する平和へのメッセージになると思った。3 人の翻訳家、さくまゆみこさん、岩淵デボラさん、早川敦子さんが出版の意義に賛同し応援してくれた。翻訳に加わった諸外国の若い人に参加をしてもらい、「平和のための戦争展」のシンポジウムを行った。多世代の市民と意見を交換し合えるこういう会に参加できて楽しかったと言ってくれた。若者が発言をしてもらうことで社会が変化すると思った。津田塾大文化祭では 2015 年に手紙を書いた若者と翻訳した若者が繋がった。キャッチボールをしながら若者が戦争や平和について意見を交わし合い、平和を感じるときはどんなときかの写真展をした。翻訳本をつくるためにやったクラウドファンディングに参加してくれた 200 人以上の方との出会いもあった。

2019 年、翻訳本完成後には、支援者の方達を招待し、津田塾大で翻訳者と語るシンポジウムを行った。第 3 部では若者たちの発案で、アートで「10 年後の世界と私」を手を使って表現することを試みた。どうなるのかと思ったが、いろんな国籍の人が参加し、その場で初めての出会った人達が一つのアートを一緒に作りながら対話して楽しかったといってくれた。平和を創るこういう方法もあると思った。若者たちがプロジェクトに参加して考えたこと――フィリピン出身の若者は、被害の戦争の歴史を母国で学んできたが、加害国である日本でそのことを知っている人や関心を持つ人もいないことにショックを受けていた。その後金子安次さんの証言と出会い、救われた思いだったと言っていた。セネガル出身の大学院生も参加した。清岡美知子さんへの手紙を翻訳し清岡さんへ手紙を書いたが、彼女の手紙から、国境を越えて日本の戦争体験から伝えられることがたくさんあるんだということを感じた。

戦後 75 年の 2020 年に一人でも多くの若者に戦争について考えてほしいと思い、「戦後 75 年企画手紙プロジェクト」を始めた。ピースフェア千葉をオンラインで行ったが、沖縄やベルリンの若者にも登壇してもらい、反響があり、いくつものメディアにも取り上げられた。7 月には、紙の本で英訳を出版した。戦後 75 年手紙プロジェクトには、269 通集まった。高校生が一番多い。2015 年に参加してくれた若者も加わった。加害体験を証言している金子さんや、篠塚さん、李さんに書いた手紙が多い。修学旅行に行けないなどの中で学校単位で手紙プロジェクトに参加してくれた。大学で数人で一通の手紙を共同で書いてくれたり、アクティブラーニングの教材として本を使ったり、横浜国大では英語演習のテキストして英訳版を使ってくれた。自分・地域・世界をキーワードに学生が各自発表をした。著者の私たちが呼ばれてワークショップも行った。東京純心は調べ学習（清岡、金子、宮城、李、篠塚）をして、休校中に手紙を書いた。修学旅行で長崎の姉妹校と交流会を予定していたができなかった。高校生が李さんに手紙を届け、対面交流をすることができた。同世代の若者体験として自分事として受けとめられていた。誕生日が一日違いなどが想像力を掻き立てるものになっていた。一人称で語られる私の戦争を受け止めた。

多くの若者が証言を「手紙」と表現している。手紙を書いてくれたと受け止めている。戦争を今を生きる自分や現代社会の問題にも地続きだと言う若者もいた。今の生活につながると思っている。加害の歴史を初めて知ったという人も多かった。戦争は終わっていないと感じた人もいた。加害国と被害国の若者が交流する中で、それぞれの国での感じ方が違うことも述べていた。

プロジェクトから見えた課題としては、

①なぜ戦争の記憶を語り継ぐのか？、

②私たちは何を語り継ぐのか？、若者たちに何が伝えられるのか？翻訳をした学生が、「若者の手紙を

翻訳して意味を見失った。同じ決まり文句で終わっている。身近な大事な人の命がかかわっていない以上、想像するのは不可能。しかし、コロナの現状を見ることで戦争を語り直すことは意味があると思った」といった。若い人の本音のところはどうだろうか。
③終わらない戦争と私たちの戦後責任とは？朝鮮半島出身の最後の元 BC 級戦犯、李さんが亡くなってもこの問題がなくなるわけではない。私達がこの問題に決着をつけなければならないと思う。私たちには戦争をした責任はないかもしれないが、戦後責任はあると思っている。
④手紙はその時代の若者たちの戦争観や若者を知る貴重な資料。第五福竜丸展示館の子どもの手紙展から、時代が透けて見えてくると思った。
　戦後 70 年と 75 年でも違う。戦後 80 年、85 年でも定点観測的に手紙プロジェクトを行っていきたい。翻訳プロジェクトに参加してくれた海外にルーツのある若者が日本社会で活躍できず苦しんでいる。彼らとの交流から日本社会の閉塞感が見えてくる。これからプロジェクトをどうしていくかだが、戦争体験者から預かった遺言を、これからも世代を越えて国境を越えて丁寧に渡すことができたらと思っている。日本人同士だけでなく、ルーツや文化の異なる人々と証言や手紙を読みあう機会があればと思っている。これからも若者やいろいろな人たちとつながっていきたいと思っている。興味のない人でも学校で取り組むことで参加をしてくれる。地域で語り合う小さな会「平和のテーブル」では、多世代の交流にも取り組み続けたい。現在、「戦後 75 年企画手紙プロジェクト」に集まった手紙をどうするか検討中。今後も手紙は募集している。戦争を知らないすべての世代に募集をしたいと思っている。